第1部

●おしゃれってなんだろう？

体験！木綿の衣類ができるまで

くらすばワークショップ主宰　吉橋（よしはし） 久美子（くみこ）

◆◆ はじめに

毎日手を通す衣類。衣食住の最初に来るこの「衣」について、私は特別気にかけることもなく過ごしてきました。とはいえ、その量はいつも悩みの種。タンスからあふれるぐらいあって……。普段着ている服はほとんどが知人から譲り受けたお古で、着道楽は全然しないのですが。成長期の子ども二人の分も、もらったり譲ったりしながら増えていきます。どうしても着られなくなったものは、資源ごみの収集に出し、一部は雑巾にしますが、とにかく量は減りません。一枚一枚を丁寧に扱う、ということもしてきませんでした。

◆◆ 仲間と工房「桜梅桃李」へ

私は仲間と「くらすばワークショップ」という活動をしています。「くらすば」とは「暮らす場」のこと。暮らしのなかの環境や子育てをテーマとして、園児と親の“かがくする心”を育むワークショップ、園児や小学生のための建築ワークショップ、そして主にそれらの参加者のママたちが学ぶ場「くらすばラボ」を毎月開催しています。

写真１　くらすばラボのメンバーと

この「くらすばラボ」の仲間たちとともに、岩地さんの工房「桜梅桃李（おうばいとうり）」を訪ね、綿の衣類ができるまでを教えていただきました（写真1）。

◆◆ まずは種を取る

岩地さんが大切に育てた木綿を最初に出してくださいました。5月に種をまき、秋に収穫するそうで、こまめに草をぬき、無農薬で育てたということでした。摘み取った状態までは木偏の漢字、「棉」とも書くそうです。白だけでなく、くすんだ美しい緑や茶色もあって愛らしいものでした（写真2）。

棉をじかに手に取るのは初めての人がほとんどでした。私もドライフラワーとして見たことはありましたが、手にとるのは初めてでした。優しい手触り。けれども種があって、そのままでは使えません。植物ですから種があるのが道理ですが、そんなことも、体験しなければ「わかる」ことができなかったのでした。

大切にくるまれた種は、周りの繊維とからんでなかなか取れません。種に残った繊維もなんだかもったいなくていつまでもむしっていたい気分ですが、一粒一粒やっていると指が痛くなります。こうして種をとられた棉は木綿となりました。

手仕事の間に、アオイ科である木綿

写真２
色とりどりの
木綿

の、淡い色合いのかれんな花の写真を見せていただいたり、通常は大量の農薬や殺虫剤を使うこと、それは働き手の健康や環境に影響を及ぼすことなども教えていただきました。衣類だけでなく、寝具、包帯やガーゼなど生活のあらゆる面で用いている木綿が、働き手やその土地に甚大なマイナスの影響を与えていることを悲しく思いました。

一方、フェアトレードや環境配慮などの考え方とともに広がっているオーガニックコットンがあります。私も以前からプレゼント用に購入をしてきました。木綿にまつわる環境問題があることや、オーガニックコットンの存在を、より広く、知ってほしいと思いました。

種取体験後、持参した子どもの古着でマスコットをつくったり、髪を結ぶシュシュを縫いました（写真3）。子どもたちは、自分が幼い頃にきていた服でお母さんが作ってくれた小物をとても喜んでくれました。

◆◇ 綿繰り機で種をとり、繊維をほぐす

後日、岩地さんから「道具が揃ったよ」と連絡をいただき、メンバーの一人とその娘さん、私、娘の四人で再び工房を訪れました。工房に入ると、素敵な木製の糸車が目に付きました。他の道具も含めて、昔の道具は、ムダのない形の美しさがあるなあと感じ入りました。

さて今回は種とりを「綿繰り機」で行いました（写真4）。こどもたちは興味津々。木綿の端っこを、くるくると回転する二本の丸棒の間に通します。すると、面白いように種が手前に落ち、繊維のみ向こう側に落ちていきます。娘たちは「面白い！」。順番に楽しんでいました。あんなに大変だった種取りも、この木でできた素朴で働きものの道具のおかげですいぶんスピードアップできました。

次は「綿打ち」です。昔は弓をつかってほぐしていたそうですが、ここでは「ハンドカーダー」という、ペットの毛をすくブラシのようなもの二つで、木綿をほぐしました（写真5 ）。片方に木綿をおいて、もう片方で繰り返しすいていきます。でこぼこしていた木

写真３　古着で小物作り

写真４　綿繰り機で種をとる

写真５　ハンドカーダーでほぐす

綿がほぐされて、綿打ちをした状態になりました。

◆◇ 糸を紡ぐ

いよいよ糸車の出番です。ハンドカーダーでそろえた木綿を端からくるっとまいて、棒状にします。そこから手で一部を引き出して、縒りをかけて細長くし、糸車にかけます。足踏みで糸車を回しながら、紡いでいきます（写真6）。羊毛に比べて綿の繊維は短いためコツが必要だそうで、簡単にはできないとのこと。

◆◇ 織る

最後は卓上の織機で平織りのコースターつくりを体験。杼（ひ）に巻かれた横糸を、縦糸の間に通します。右から左へ通した糸を、くしのような筬できれいに手前に寄せて、縦糸の組み合わせ（上下）を逆にして、今度は左から右へ。そのとき、端が引きつれてしまわぬように、親指と人差し指で抑えておきます。これを繰り返して「布」ができていくのです（写真7、写真8）。

写真６　糸車で紡ぐ

今回はコースターでしたが、一枚の布をつくるには、長い長い時間と根気が必要でしょう。さらに「衣類」になるには、多くの人々の手間と時間がつぎ込まれることになります。今はもちろんほとんどが機械だと思いますが、昔の人はこうやって布地を作り、衣類を作っていたのだと感慨深いものがありました。

◆◇ 衣類ができるまで、を知ることは

種取を体験したメンバーの感想は、「楽しくためになる時間だった。手を動かす事が大事」「普段知ることのない綿花について話が聞けて良かった」「生地を簡単に使い捨てにできない気持ちになった。その事を子供達に伝える事が課題」「岩地さんのお話は新鮮で、物を大切にしたり、気持ち一つで心豊かに暮らすという、忘れかけた事を思い出すことが出来た」「“布”というあまりにも身近なものにもエコを考えるヒントがたくさん含まれている」というものでした。

その後の織りまでの過程も、新鮮な体験でした。子どもたちにとっても、全く見えていなかった衣類の向こう側が見えたひとときだったようです。神妙な顔つきで織り機に向かっていた子どもたちの感想は「楽しかった、もっともっとやりたい！」でした。

子どもといえば、一連の体験をしながら思い出した絵本がありました。『ペレのあたらしいふく』というスウェーデンの絵本です（作・絵 エルサ・ベスコフ、訳：小野寺百合子 福音館書店）。これは木綿ではなく羊毛なので

写真７　コースターを織る

写真８　コースター

すが、小さな男の子ペレが、自分の持つ子羊の毛を刈って、それを服にするまでに近所に住む何人もの人に順番に仕事を頼みます。その代わりに頼まれた仕事をするというものです。人の手を介してものが出来上がっていくことがシンプルに描かれていて、ペレも自分が出来ることをする、というのがほほえましい絵本です。最後は羊に「ありがとう」と感謝する少年を、関係したみんながにこやかに眺めています。こんなふうに、服を作ってくれる人や服が作られた過程を知っていたら、衣類をどれだけ大切にすることだろうかと思います。

こうしたこととは全く逆に、今、お店に行けば即、服が買え、お店によっては極端に安価であることは、そのありがたさを感じられないことにも通じていると思います。出張先で夫が買った300円のＴシャツは、洗うたびに縮んでおへそがみえそうになっている…などと笑っていたのですが、安価の背景には、働き手や生産地の苛酷な状況が見え隠れしていることに、私もみんなも、うすうす気づきながらそのままにしているような気がします。そうしたものは、やはりごみにすることに抵抗もないものです。

◆◇ おわりに

今回、環境カウンセラー岩地加世さんに「木綿の衣類ができるまで」を体験させていただき、私が思ったのは、もう少し、衣類のありがたみを感じなければということでした。お日さまの光を浴び、雨を受け、地面から栄養を吸い上げて育った木綿が、たくさんの手間をかけて紡がれ、織られ、染められ、縫製されて、流通し、ここにある。そして、捨てられる。その過程がどのように辿られるかで、農薬の使用、働き手の労働条件、文化の継承、そしてごみの問題などに大きな差ができることを考えようになりました。木綿が大地の恵みであることや、布をつくるためにかけられた手間と時間を考えて、まず、必要以上に買わないこと。着続けること。お下がりの習慣を大事にすること。こうしたことは以前から頭では考えていたことですが、今回の体験で、より一層、胸に刻むことが出来ました。ただ、衣類は流行というものによって寿命が決まる側面があり、また、それによってお金が動く現状があります。買いすぎない、というライフスタイルが、流通や服をつくる側にも伝わり、長く着られるものを作ってくださったらいいなあと思います。衣類を身にまとって感じる優しさのままに、木綿が作られるよう、消費者として応援していけたらと思っています。そしてその衣類を大事に最後まで使うライフスタイルを子どもたちに伝えていけたらと思っています。